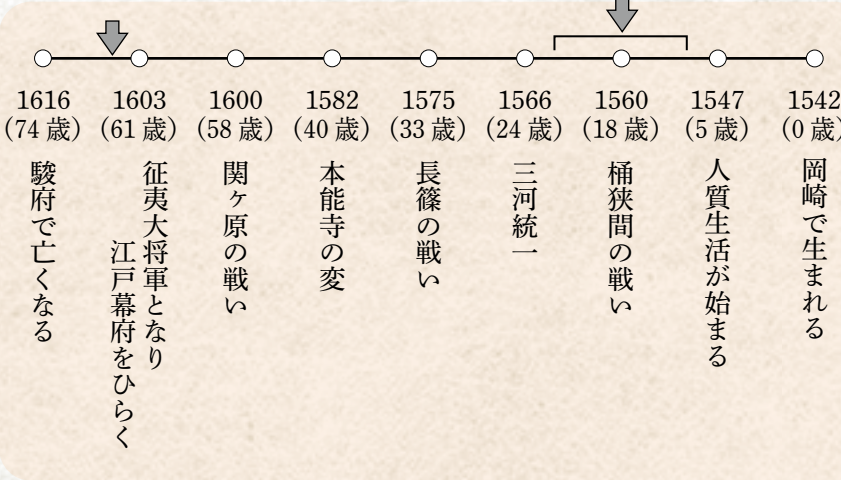


家康もあつる

第2回

家康も楽しんだ豊橋鬼祭

今回はこのあたりのお話



豊橋市内の徳川家康ゆかりの地を、2か月に1回の連載で学芸員が紹介します。



問合せ 文化財センター (☎56・6060)

安久美神戸神社(以下、神明社)の歴史は古く、平安時代中期に飽海(現在の飽海町を含む豊橋公園の辺り)が伊勢神宮に寄付されたことに始まるといわれます。

駿河・遠江(現在の静岡県)の戦国大名だった今川義元は、今橋城(今の吉田城)を東三河の重要な拠点と考え、天文15(1546)年に支配下としました。翌年から、神明社の社殿の整備を行ったほか、吉田神社の神輿作り社殿の整備も行いました。これら地域の神社を手厚く扱ったのは、地域住民の要望を聞きながら円満な統治を目指したためと考えられます。

国の重要無形民俗文化財に指定されている神明社の「豊橋鬼祭」は、かつては1月13日、14日に開催され、竹千代と称した若いころの徳川家康も観覧

に訪れました。

さて、令和4年12月号に掲載した第1回で紹介したように、大津湊(老津)で戸田氏に裏切られ、織田氏に引き渡された竹千代は、さらに人質交換によって織田氏から今川氏に引き渡されました。その後の少年期は、現在の静岡市で過ごしていたといわれる一方、現在の豊橋市で過ごしていたという説もあります。

13歳になった竹千代は神明社の鬼祭を観覧しました。特に司天師が片足を高く上げて踊る田楽を気に入ったようで「おもしろかった」と神主に声をかけました。

竹千代は成人した後、「元信」「元康」と名を変え、松平氏の当主となりました。また、桶狭間の戦いで織田信長に今川義元が敗れたことを契機に今川氏から独立し、三河統一を目指します。各地で戦いを繰り返す中で、永禄6(1563)年に「家康」と改名し、翌年から吉田城を攻めました。永禄8(1565)年3月ころ、家康の重臣で叔父でもある酒井忠次は吉田城を制圧し、ここを拠点に地域の支配を進めました。東の今川氏や北の武田氏と対抗しながらも、忠次は吉田城主として東三河の武士たちをまとめ、地域の統治にあたりました。

ところで、鬼祭で竹千代に声をかけられた神明社の神主は、80歳を超えてから、征夷大將軍となった62歳の家康と京都の伏見城で面会しました。この時「今でも祭礼では片足を高く上げて踊るのか」と家康から尋ねられたそうです。



家康が腰を掛けたと伝わる大石
腰掛松は植え替えられていますが、この岩は変わらず松の根元にあります。

かつての神明社は吉田城内にあり、現在の豊橋球場の北側にありました。その場所には「神明宮旧趾」の石碑が、家康が鬼祭を見た所には「徳川家康公腰掛松旧趾」の石碑が立っています。この松にちなみ、神明社では毎年1月1日〜7日に「東照宮御由縁松願掛神事」を行っています。



腰掛松旧趾の石碑
豊橋公園の駐車場にあります。神明社は明治時代に現在の場所へ移転しました。

鬼祭は今年も2月10日(金)、11日(祝)に行われます。家康も見た郷土の伝統行事に思いを馳せてはいかがでしょうか。